

## こころ こうりゅう 心の交流

碁の別称に「手談」<sup>しゅだん</sup>というのがある。わたしの大好きな<sup>だいず</sup>ことばである。

口<sup>くち</sup>で物<sup>もの</sup>を言<sup>い</sup>わなくても、打<sup>う</sup>ち下<sup>お</sup>ろす一<sup>い</sup>手一<sup>い</sup>手が雄弁<sup>ゆうべん</sup>にお互<sup>たが</sup>いの心<sup>こころ</sup>の中<sup>なか</sup>を語<sup>かた</sup>っているわけで、沈黙<sup>ちんもく</sup>が深<sup>ふか</sup>ければ深<sup>ふか</sup>いほど、手談<sup>しゅだん</sup>はいよいよ奥<sup>おく</sup>深<sup>ふか</sup>いものとなる。

世<sup>よ</sup>の中<sup>なか</sup>には、往々<sup>おうおう</sup>にしてペラペラしゃべりまくりながら碁<sup>ご</sup>を打<sup>う</sup>つ人<sup>ひと</sup>もいるが、わたしどもに言<sup>い</sup>わせれば、よくもまあ気<sup>き</sup>が散<sup>ち</sup>らないで碁<sup>ご</sup>が打<sup>う</sup>てるものだと思う。碁<sup>ご</sup>は、やはり沈思黙考<sup>ちんしもつこう</sup>し、想<sup>そう</sup>成<sup>な</sup>ってから初<sup>はじ</sup>めて碁石<sup>ごいし</sup>を一<sup>ひと</sup>粒<sup>つぶ</sup>だけつまむべきものだ。

とはいえ、いつもにぎやかに碁<sup>ご</sup>を打<sup>う</sup>っている人<sup>ひと</sup>に対<sup>たい</sup>し、急<sup>きゅう</sup>に静<sup>しず</sup>かにしろと言<sup>い</sup>ったところで無理<sup>むり</sup>な話<sup>はなし</sup>だ。ちょうど、ガード下<sup>した</sup>に住<sup>す</sup>んでいた人<sup>ひと</sup>が静<sup>しず</sup>かな山奥<sup>やまおく</sup>に引<sup>ひ</sup>つ越<sup>こ</sup>したようなもので、あまり静<sup>しず</sup>かで調子<sup>ちょうし</sup>が狂<sup>くる</sup>う意味<sup>い</sup>もあるだろう。しかし、ガード下<sup>した</sup>はあくまで仮<sup>かり</sup>の住居<sup>じゅうきょ</sup>であり、人間<sup>にんげん</sup>らしく住<sup>す</sup>むのにはよい環境<sup>かんきょう</sup>が必要<sup>ひつよう</sup>であると思う。碁<sup>ご</sup>はやはり、「手談<sup>しゅだん</sup>」でなければなるまい。

この手談<sup>しゅだん</sup>という語<sup>ご</sup>が、最<sup>もっと</sup>も身<sup>み</sup>にしみて感<sup>かん</sup>じられるのは、外国<sup>がいこく</sup>へ行<sup>い</sup>って碁<sup>ご</sup>を打<sup>う</sup>つときである。こちらがうまい手<sup>て</sup>を打<sup>う</sup>つ。心<sup>こころ</sup>の中<sup>なか</sup>で、

「どうです。うまい手<sup>て</sup>でしょう。ちょっとお弱<sup>よわ</sup>りになられたのと違<sup>ちが</sup>いますか。」

とニヤニヤする。相手も頭をかいて、

「弱ったなあ、日本のプロは恐ろしいことをやってくるわい。」

と応じている。たまに向こうがうまい手を打てば、こちらがウーン困った

う風情で二十秒ほども考えるふりをする。相手は

「どんなもんだい。」

というふう<sup>せ</sup>に背を伸ばして大威張り<sup>おおいば</sup>である。こうして一時間か二時間お相手

をするのだから、相手の気心<sup>きごころ</sup>はもちろん、時には性格<sup>せいかく</sup>までわかってしまうこ

とがある。この点<sup>てん</sup>、そこらあたりの易者<sup>えきしゃ</sup>さんよりはよほど確か<sup>たし</sup>で、アツとい

う間に百年<sup>ひゃくねん</sup>の知己<sup>ちき</sup>ができてしまう。碁<sup>ご</sup>を知っている人<sup>ひと</sup>の天与<sup>てんよ</sup>の恩恵<sup>おんけい</sup>だ。

まことに、碁<sup>ご</sup>は、それ自体<sup>じたい</sup>が一つの言語<sup>ひとげんご</sup>であると思う<sup>おも</sup>。

なかやまのりゆき「いごせかい」いわなみしよてん  
中山典之『囲碁の世界』岩波書店より